

近森リハビリテーション病院 リハビリテーション部

部長 高芝 潤

はじめに

2025 年度は、理学療法科、作業療法科、言語療法科と連携し、回復期リハビリテーションの質向上と安定した運営体制の構築に取り組んだ。人員の増減や配置調整が求められる中、ユニット単位の運営を継続し、限られた人員でも効率的かつ質の高いサービス提供に努めた。

また、新入職員の育成を通じて教育体制を強化するとともに、治療技術の向上や臨床研究の推進に取り組み、専門性の向上と体制の充実を図った。

運営・取り組み

2025 年度はユニット制を基本とし、各ユニットに主任または療法士長を配置し、現場マネジメントの強化を図った。理学療法科では 7 ユニット体制のもと、1 日 19 単位を目標としたが、実績は平均 18 単位程度であった。一方で、間接業務や交代勤務によるロスを含めると実質的には 19 単位相当の業務量であり、業務効率化が課題となった。今後は業務の見直しや役割分担の最適化を進め、効率と質の両立を目指す。

作業療法科では、入院患者 720 名中 699 名 (97.0%) に作業療法を提供し、365 日体制を維持した。患者 1 人あたりの実施単位数は平均 2.8 単位と増加し、運動器疾患の増加に対応した訓練体制を整備した。ADL・IADL 支援や家庭訪問、福祉用具選定など、退院後の生活を見据えた支援も継続した。

言語療法科では、人員減少により厳しい体制で開始したが、週 6 日稼働や人員補充により体制を整備した。摂食機能療法の強化や低周波刺激装置の活用など、臨床の質向上とデータ蓄積を進めた。また、患者数に応じた対応により収益確保にも努めた。

部全体としては、回復期に特化した体制のもと、多職種連携を強化し、早期回復と社会復帰支援を推進した。さらに、関連施設との人事交流によりスタッフの経験値向上を図った。

教育・学術活動では、各科で院内研修や症例検討会を継続した。理学療法科は年間 6 回の研修会と 3 回の症例検討会を実施し、作業療法科は専門チームによる教育活動を推進した。言語療法科は外部講師による臨床指導を継続した。各科とも学会発表を行い、得られた知見を院内に還元し、科学的根拠に基づくリハビリテーションの提供に努めた。

終わりに

2025 年度は、人員変動や患者構成の変化に対応しながら、各部門が連携してサービスの質の維持・向上に努めた。ユニット運営や教育体制の強化により、安定した医療提供体制を維持することができた。

一方で、業務量増加や効率化の課題も明確となっており、今後は業務効率化と成果の可視化を進める必要がある。スタッフの専門性向上と組織の最適化を図り、2026 年度も質の高いリハビリテーション医療の提供に取り組んでいく。